

## 2016年11月20日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 5章 1～12節

説教：聖霊を欺く

あらすじ

ペテロとヨハネが宮の中で大ぜいの人々を前にして、イエス・キリストの死とよみがえりのことを話していたとき、宮を管理する祭司がやってきて、ふたりを逮捕してしまいます。キリストを殺したのは祭司たちであるとペテロが大声で語っていたことに腹を立てたのが原因でした。翌日、ふたりは釈放されるのですが、そのとき祭司はこう言って脅迫します。「またイエスの名によって語ったり教えたりするようなら、今度はひどい目に遭わせるから覚えておけ。」このことをペテロから聞かされた教会の人々はすぐに神に祈りました。今自分たちは祭司に脅迫されているけれど、大胆に神のことばを語る力を与えてくださいという祈りです。神はこの祈りを聞かれ、不思議な方法を通して教会を励まします。そうして教会は一つとされ、人々は自分の持ち物を教会に献げます。それを教会のものとして困っている人たちのために使ったり、宣教活動のために使われるようになっていった。それが前回までのあらすじです。

### 1 問題はなにか

1) 代金の一部を自分のために残したから？

このとき教会は教会員の数が増え、活動も盛んになっていく。今ふうには右肩上がりの成長ですから非常に順調に見えます。ところが今日の箇所は、アナニヤとサツピラという夫婦がペテロに責められて死んでしまうという話が載っている。みなさんはここを

読んでどのように思われたでしょうか。このふたりは自分の持ち物を売ってその代金を教会に献げたのです。確かにふたりは代金の一部を自分のために残しました。でも、そのことのどこが悪いのか。私たちだって、アナニヤとサツピラと同じようなことをするかもしれません。例えば、使っていない土地があったのでそれを百万円で売ったとしましょう。聖書では十分の一を献げるようにと勧められているので、では十万円は教会に献金しよう、残りの九十万円は自分たちの家を修理するために使う。そんな話をするでしょう。どんな金額であれ教会に献げたいという心が起こされることは尊いことではないでしょうか。ところがどうでしょう。アナニヤとサツピラは教会に献げたのに、死んでしまった。これでは怖くてとても献金もできないということになりかねません。

2) あなたのものはあなたの自由にしていいのです

いったいふたりの何が問題であったのか。ペテロのことばからさぐっていきます。3、4節。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」

ペテロは言っています。「売ってからもあなたの自由になったのではないか。」これが

一つ目の手がかりです。言い換えれば、「あなたは、持ち物を売った代金をどのようにしようとも自由にして良かったのだ。」別に特別なことは言っていない。当たり前のことのように思いますが、私たちにとって大切な原則を語っています。

みなさんは悩んだことがあると思います。今月はどれだけ献金したらよいだろうか。献金袋がまわってくるけれど、いったいいくら入れたらよいか。ペテロが言っています。「それはあなたのものだから、あなたの自由にできる。」ですから、いくら献金するかはみなさんの自由。じつにシンプルな原則です。

アナニヤとサツピラも、売った代金をどうするか自由に決めることができました。その結果、一部を自分のものとして残し、残りを教会に献げることにした。別に問題になることはなさそうです。ペテロが問題にしているのは、どうも別の所にありそうです。

### 3) 聖霊を欺いた

ペテロは、「あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」と言っています。3節では「聖霊を欺いた」とありますが、同じことです。土地を売った代金の一部を自分のものとしたことが問題だったのではない。聖霊を欺いたこと、神を欺いたことを大きな問題だと考えているようです。では、聖霊を欺く、あるいは神を欺くとはどんなことなのか。アナニヤとサツピラは具体的に何をしたのか。

今日の箇所だけ読んでも見えてきません。4章の最後のところと関係があります。そこには、バルナバという人が自分の畑を売ってその代金を教会に献金したということが書かれています。そしてその次にアナニヤ・サツピラ夫婦が同じことをした。そういう順

番になっています。この二つのことになんらかのつながりがあるようなのです。

### 4) プライドという罪から

ここから種明かしが始まります。まずバルナバから見ましょう。彼は自分の畑を売って教会に献げます。聖書にわざわざ名前が記されるくらいですから、当時、このことは教会の中でも大きなニュースになったと思われる。こんなとき、人はどんな事を言うのでしょうか。「バルナバは教会のためにこれだけの犠牲を払ったのか。すごい。」「十二人の使徒たちに続く、次の指導者にふさわしいのではないか。」だいたいこんなことを言われて、バルナバの名前は教会の中で大きなものとなっていったでしょう。

それを見ていたのがアナニヤとサツピラです。ふたりは以前からずっと教会を支えるような中心的な働きをしていたのだろうと思われる。そのふたりがバルナバの話聞いたとき、急に心が騒ぎました。一生懸命教会のために仕えている自分たちのことはほとんど評価されることはない。ところが、多くの献金をしたというので、バルナバだけが褒めそやされる。バルナバへの対抗心のようなものが燃え上がります。自分たちも土地を売って献金しよう。そうした人々は自分たちのことをもっと高く評価してくれるに違いない。それで土地を売ってお金にし、代金の一部を手もとに残しておいて、ペテロへはこう報告します。「ペテロさん。私たちは持ち物を売ってその全額を教会のために献金します。どうか受け取って、主のために用いてください。」

ペテロは8節でアナニヤに問いかけました。「『あなたがたは地所をこの値段で売った

のですか。私に言いなさい。』彼女は『はい。その値段です』と言った。」別に隠さなくても良かったのです。正直に、「いいえ。これは売った代金の一部です。全部ではありません」と言えばなんの問題にならなかった。ところがふたりは嘘をついた。「この値段で売りました。」

なぜ嘘をつくのでしょうか。バルナバ以上に教会で高く評価されたいからです。そのためには自分がどれだけ犠牲を払ったかを示す必要があります。一部を献げたと行ってしまえば、献げた犠牲はちっぽけなものになる。でも、全部を献げたとすればそれだけ犠牲を払ったのだと思ってくれるに違いない。プライドという罪が嘘となって口から出てしまいました。ペテロはこの嘘を見抜き、あなたがたは聖霊を欺き、神を欺いたのだと厳しく指摘し、その結果ふたりは息絶えてしまいました。

## 2 祈りとその結果

1) しるしと不思議なわざをおこなわせてください

こんなことで死んでしまうのかとびっくりしてしまいます。でもこのことが起きた意味を考えなければなりません。一連の流れをもう一度おさらいしておきます。事の発端は教会の祈りにあります。祭司たちの脅迫にさらされたとき教会は祈りました。4章29, 30節。「主よ。いま彼らのおびやかしをご覧になり、あなたのしもべたちにもことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばして、いやしをおこなわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください。」

イエスの御名によって、しるしと不思議な

わざをおこなわせてくださいと祈りましたが、聖書には具体的にどんな不思議が起きたのかは書かれていない。ただ一つ書かれているのが、このアナニヤとサツピラの事件です。私たちは「しるしと不思議」と聞くと、足のなえた人が一瞬にいやされるような出来事を思い浮かべます。もちろんそのようなことも含まれるでしょう。

### 2) 教会が罪から守られる

しかし、アナニヤとサツピラのことを見ると、どうも違う側面が見えてきます。ペテロがふたりの中にある罪を一瞬にして見抜き、その場で息絶えてしまう。これは、一つの「しるしと不思議なわざ」ではないですか。もしそうであるなら、このことも教会の祈りに対する神の応えということになります

教会が成長し、救われる人も増えていく。目に見える所では何の問題もなかったかもしれせん。しかし神は目に見える所だけをご覧になっているのではない。むしろ目に見えないところを見ておられる。ただ人が増えればよいというのではないのです。神は徹底的に罪のことを問題にします。アナニヤとサツピラが教会に罪を持ち込もうとしたとき、神はペテロを通して強く働かれ、教会を守ります。「しるしと不思議なわざ」は体をいやすと言うことだけにとどまりません。ときには、人の罪が明らかにされるために「しるしと不思議なわざ」が行われることもあるのです。

### 3 聖霊を欺く必要がない

教会はこれを見たとき、「非常な恐れが生じた」とあります。当然です。今こんなことが教会の中で起きたら私達も恐れるで

しょう。でも、ただそれだけなのでしょうか。ここだけ読めば、教会は怖いところという印象で終わりがちですが、でもこのところから学ぶべき事は沢山あるように思うのです。三つあります。

まず一つ目。まず安心できることから。教会に献げるとき、ほかの人がいくら献金したからとか比べる必要がない。自分の心に従って自由に決めて良い。

二つ目。これは警告ですが、神はささげるときの動機を問いかけておられるので、良く吟味しなさいということになります。もしプライドとか人間的な動機で金額を決めてしまうなら、それは聖霊を欺くことになる。神が見ておられるのは、金額が多いとか少ないとかではない。どんなときでも、神がまずご覧になっているのは私たちの心の内だということです。人の目はごまかせても神の目はごまかすことができません。怖いと思いますか。いや、むしろ最初から神はご存じなので、開き直りのようですが、神から隠れることなど考えなくて良い。そう考えるとこれはずいぶん気が楽になります。よく「風通しがよい」と言いますが、よいことでも悪いことでも神に正直に申し上げればそれでよいのです。

そして三つ目。これは慰めです。世の中を生きていくためにときには小さな嘘をつくこともあったかもしれません。そうしなければ生き残れないと脅迫されてきたからです。でも、教会は違う。主のからだである教会の中では、嘘をつく必要がない。弱い私たちがその所に集められて、主は一つにしてくださいと約束してくださいます。